
音楽室の恭子さん

Pomme

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

音楽室の恭子さん

【Zマーク】

Z9530Y

【作者名】

Pomme

【あらすじ】

「キミ、なかなか上手いわね」

そう言って彼女は 恭子はシニカルに笑った。

僕こと三浦秋人は夕方、誰もいない音楽室で一人の少女と出逢う。しかし彼女は音楽室の幽霊で

これは、どこかに落ちていそうな愛しくて切ない物語。

遭つ

噂は聞いたことがあった。

「キハ、なかなか上手いわね」

彼女はシニカルに笑う。

『放課後誰もいない音楽室から誰かの歌声が聞こえてくる』

全く信じていなかつた訳ではなかつた。

「じゃ、これは素敵なお返しね

彼女は静かに目を閉じて、凛とした音を紡いでいく。
どこかで聞いたことあるような美しいメロディだつた。

彼女は唄いながらゆっくりと歩み出す。
僕が弾いていたグランドピアノをすり抜けて。
まるで其処に存在しないかのように。

唄い終えた彼女は、くるりと僕の方を振り向く。

「キハ、名前は？」

僕はあまりの非現実に逆に冷静になつていた。

「

2年B組、三浦 秋人」

「ふーん、ミウカ アキヒト・・・・」

彼女はすとん、とグランピアノに腰を掛け、華奢な足をぶらぶらとさせた。

「アキヒト・・・・うーん・・・・アキたるー・・・アツキー・・・」

「

途端、彼女の瞳が輝く。

「アツキー！――！――！いいわね！――よしひ、キミは今日からアツキーよ！――！」

彼女は嬉しそうに僕を指さす。

「私は草薙 恭子。元2年A組よ。よろしく、アツキ――！」

彼女が笑つたとき、僕は思わず目を細めた。

はつきりと言つと彼女は美人だ。ストレートの黒髪は風が起くるたびさらりと妖艶に輝く。頬は薄桃色に染まり、笑うとぱちくりとした瞳が楽しそうに微笑む。思わず見とれてしまつただが、僕が目を細めたのはそれが理由ではなかつた。

単に、彼女の華奢な体を透き通つてオレンジに輝く太陽が眩しかつただけのことである。

遭り（後書き）

あまり長くならないうとは思こますが、連載と致します（*^-^*）
なるべく早く更新しようと思こます（・・・・）△

笑顔

太陽が西に傾き、今は使われることのない第3音楽室も柔らかなオレンジの陽に照らされて不思議な雰囲気を醸し出している。

「やつほー、アツキー！ やつぱり来たわね」

音楽室の入口で頭を抱える少年

三浦秋人に、グランド

ピアノの上に腰掛ける少女

草薙恭子はたのしそう

に手を振った。

「・・・なんているんですか」

少年は力なく壁に寄りかかり、黒髪の美しい少女を見る。

「なんでって言われてもねー。ほらー私、音楽室の幽霊だしー？」

彼女は頬に両手の人差し指をあてがつて、ニッコリと微笑む。

差し込む夕日に、彼女の影は無かつた。

「・・・ですよねー・・・」

秋人は自分が昨日見た少女は幻覚だつたんじやないかと思いっこく足を運んだのだが、その淡い期待はあっさりと打ち砕かれた。

溜め息をつく秋人の姿に、恭子は少しばかり驚いた顔をする

「あら、意外ね」

「・・・何がですか」

「てっきり悲鳴を上げて此処から走り去つていくんだとばかり思つていたわ」

「・・・それをやるなら昨日のつむじをつりますよ」

「すっかりタイミングを逃したって訳ね

「ええ、それに、こんな女子に悲鳴を上げて逃げるほど男は捨てていないですよ」

「あら、分からないわよ？」

刹那、少女は音も無く秋人の目鼻の先に立つた。

「・・・もしかしたら、私がキミを取つて喰うかもしれないじゃない」

彼女が挑発的に微笑む。

秋人は一瞬驚いたが、すぐに呆れた表情を見せた。

「・・・触ることもできないのにどうやって喰うんですか」

「・・・あら、その事は考えてなかつたわ。失敗失敗」

恭子はそれまでの空氣を壊すように冗談交じりに笑うと、

「キミ、合格」

と彼を指さして花の咲くような笑顔を魅せた。

それは昨日遭つてから今日この時まで、秋人が見た中で一番美しい笑顔だった。

笑顔（後書き）

ノロノロな亀展開ですねー・・・(、ヽヽヽ)あ、補足ですが、音楽室は一応第3音楽室とします・・・、「音楽室が3つもあるわけないだろ!」的なツッコミはナシでお願いします

溜め息

賑やかな声が遠くから聞こえる。

お昼時になると、普段は暗く沈んだ雰囲気の第三音楽室も暖かい空気に包まれるようだ。

「…………アッキー来ないなあー」

澄んだ声が退屈そうに呟いた。

さういひと艶のある黒髪が古ぼけた楽器の間に揺れて見えた。

よく見ると、音が出るかも怪しいような楽器たちの間に美しい少女が寝転がっていた。

閉ざされたカーテンの間から差す明るい光が少女の影をつくることなく、ただ埃にまみれた床を照らすだけである。

「暇だー・・・恭子ちゃんは暇だぞー・・・」

音楽室の幽霊として小さな噂の中心となっている幽霊・草薙恭子ちゃんはものすごく暇を持て余していた。

「…………なにしてんの」

購買で買ったパンを片手に、秋人は呆れた目で恭子を見下ろす。がばっと勢いよく上半身を起こした恭子は、

「アッキーがあまりにも遅いから暇で暇で仕方がなかつたんだぞーつー！」

と拳を振り上げたが、それは秋人の脚を空しくすり抜けた。

「暇つて・・・僕は暇じゃないんですから・・・」

秋人は座り込んでパンをかじる。

「アッキーが暇じゃなくても私は暇なのーー！」

「どー」のお嬢様だよ

「女の子は誰でもお姫様になれるのよー！」

「わがままのレベルがお姫様を超えるよ」

秋人が溜め息をついた時、外から騒がしい声が聞こえてきた。
途端、秋人が楽器の間に素早く潜り込んだ。

アツキ「何してんの?」

『いいから静かこー!!』

人差し指を必死に口に当てて訴える秋人の恐ろしい剣幕に、恭子は大人しく座つて いることにした。

ガチヤ

扇が開くと同時に、数人の女子生徒のはしゃぐ声が大きく響いた。

「秋人先バーアイ……ってあれ？」

「ほら、ゆつたでしょ？こんなとこに先輩が来るわけないって」

「でもさつき見たよ!! あれは絶対秋人先輩だつたもん!!」

「見間違いでしょー」

「秋人先輩、何気足速いからすぐ見失つちゃうんだよねー・・・」

「また明日にしようか？」

「だねー・・」

扉が閉まる音がしたあと、賑やかな声が段々と遠ざかっていき、音楽室は再び静寂に包まれた。

•
•
•
•
•
•

「……………」

樂器の下で、秋人が緊張感を押し出すように深い溜め息をついた。

「アツギーではモツテモテじゃないの？」
恭子がニヤニヤしながら言うと、秋人は苦い

「ああやつて来られぬべ、すゞく立つしからかわれるから嫌だ」

「あら、乙女心をないがしろにするなんて酷いわ、アツキー！」

「その気もないのに優しくするほうが酷いだろ」

「それもううね

カラカラと笑う恭子。

もへ隠れる必要はないのだが、二人にしはぐくの體操器と樂器の間に挟まっていた。

カーテンの隙間からは青空が覗いている。

「・・・・・はあー・・・・」

秋人はもう一度深い溜め息をついた。

溜め息（後書き）

アツキーは意外と人気があるようです。

王道ですね！いいじゃないか王道！！
一話一話が短いのは『』愛きよ（（『』y

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9530y/>

音楽室の恭子さん

2012年1月5日21時47分発行